

横穴墓の研究（7）

－形態・構造面からの検討を中心に－

古墳時代研究プロジェクトチーム

1. はじめに

前回の（6）では、Ⅰ～Ⅳ類の形態・構造面での全体の検討を通じてみた相互の相対的な先後関係についてのまとめをした。しかし、相互の形態の相対的な先後関係は全体の大きな変遷としてとらえられるものの、個別の地域での具体的な形態の変遷観にあてはめようとする、一律には特定しがたいことが判明した。こうした形態・構造面の適用上での有効性を考えると、地域的な特徴の考慮なしで一連の検討は「分類のための分類」にすぎず、それを生かすには別のアプローチが必要となると考えられる。

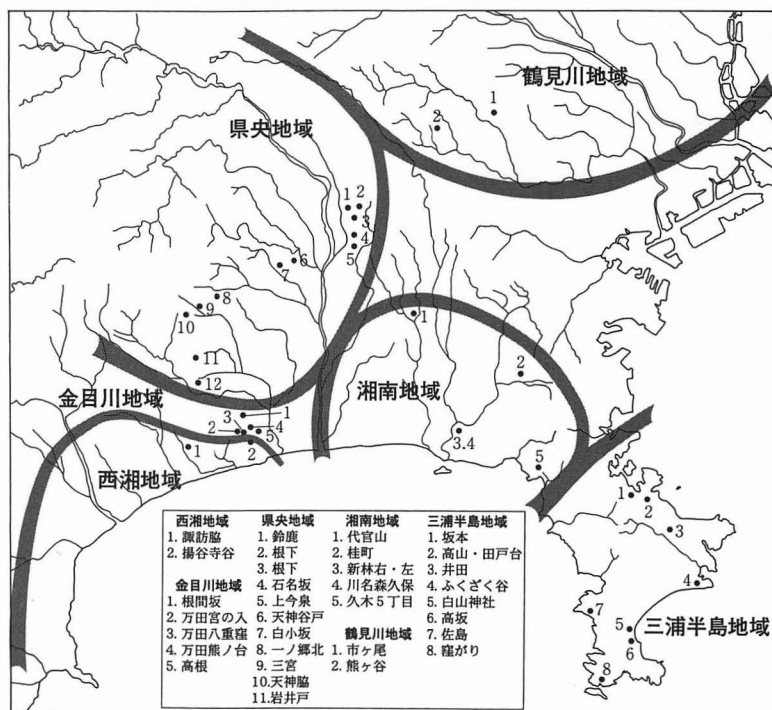
そこで、今回は横穴墓をより具体的に地域の特徴をとらえるという視点から検討の方法論を若干変更し、県内の地形的な境界を形成する河川、丘陵を区分をもとに、研究史的な成果を踏まえて、県内を三浦半島、湘南地域、鶴見川流域地域、県央地域、金目川流域、西湘地域とおおまかに6つの地域に区分してとらえることにした。その地域の中での横穴墓の特徴的な変遷を辿るために、基本的に各地区の中での群を構成する横穴墓群に検討対象とし、出土資料の年代を参考にしながら群構成の形成の過程をもとに形態・構造面の変遷を検討することにした。そして、その個別の地域の成果をもとに、最終的に変遷過程を相互比較をし、地域内での横穴墓の形態・構造面での特徴を明らかにし、全体の変遷観との対比をすることを意図した。

こうした試みで、前回までの結論との対比を一挙に論究できることが望ましいが、紙数の関係で前後2回に分けて掲載せざる得ず、間延

びの観を拭い得ないが、今回は前編として県央地域、西湘地域、三浦半島地域の3つの地区の状況について上記の方法をもって具体的な形態・構造面での流れを提示することにした。

次回の後編では残りの地区と総体の分類観の変遷と個別の地域の特徴的な形態との関係について、総まとめを行い、一連のしめくりとする所存である。

（長谷川 厚）



第1図 検討対象地域と横穴墓

2. 各地域の検討

・県央地域（秦野市・伊勢原市・厚木市・相模原市・座間市・海老名市）

（１）地理的位置と環境

県央地域とは、広義には神奈川県中央部の相模川中流域から丹沢山地東端の裾部分を指す地域称であるが、ここで対象としたのは現在の秦野市・伊勢原市・厚木市・相模原市・座間市・海老名市で、古代における大住郡・余綾郡・愛甲郡・高座郡の一部に相当する。

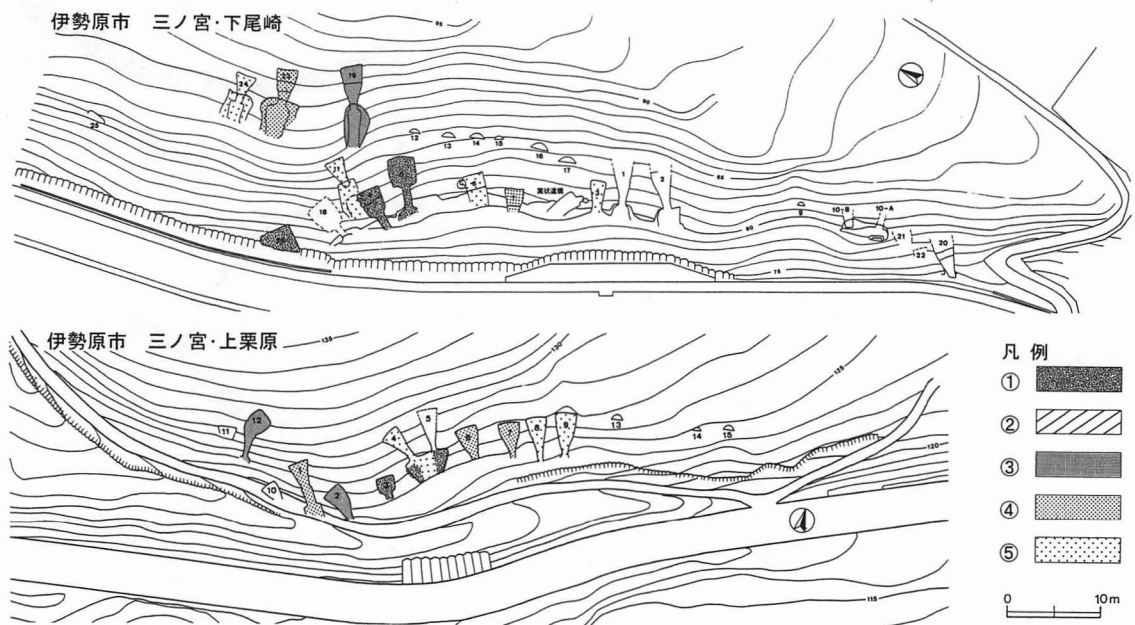
（２）分布の状況

相模川右岸では、県北西部を占める丹沢山地から東に派生する山地沿いに分布し、沖積平野との境付近にかけて秦野・伊勢原・厚木市と密に認められる。特に伊勢原市域では三ノ宮地区や日向地区に多く、古墳の分布と共に注視される。相模川左岸は、座間丘陵から沖積平野へ至る段丘崖面や、目久尻川へ至る座間丘陵東側を中心として分布し、特に座間市域では濃密である。今回は三ノ宮地区において群集し、豊富な遺物が出土した三ノ宮・下尾崎遺跡、三ノ宮・上栗原遺跡（註１）を中心に検討することとした。

（３）三ノ宮・下尾崎遺跡、三ノ宮・上栗原遺跡と当該地域の横穴墓について

三ノ宮地区での横穴墓の分布は鈴川の右岸、栗原川流域にその多くが認められ、尾根筋には古墳が、崖面には横穴墓が築造される状況を呈す。三ノ宮・下尾崎遺跡（以後下尾崎）と三ノ宮・上栗原遺跡（以後上栗原）は600mという近い距離で存在し、上栗原からは下尾崎を正観可能で、更には平野部までにも視界が広がる。

下尾崎（第2図）は南に派生する丘陵西斜面に位置し、標高からは3段程度の築造がされる。下段北寄りと中央、上段北寄りで比較的遺存が良好で、小単位の支群を形成する。それぞれ平面形態において大別可能であり、広義にはⅡ類（方形）とⅢa類（撥形）に分類される。類似する形態が近接する傾向は窺えるが、初現以降は各形態とも歩調を合わせて微妙に変化するようである。上栗原（第2図）でも標高からは3段の築造がみられ、中央の一群とその両側に展開する小支群を形成し、各形態は下尾崎と同様の変化をとる。上栗原4・5号墓では前庭部を共有し、羨門には石積みがされる。前庭部の様相は、以前に築造された横穴墓



第2図 三ノ宮・下尾崎遺跡、三ノ宮・上栗原遺跡遺構配置図

の再利用が計られ、特殊な例として注目される。当初の玄室は前壁を持ち、隣接の3号墓に類似する。それを壊してⅢ類の玄室が構築され、形態から類推される新旧関係が把握された貴重な例である。

下尾崎、上栗原における形態区分は、調査された横穴墓の大半で天井が崩落し埋没していたことから縦・横断面における情報が乏しく、ここでは平面形態に主眼をおく。前述の切り合い状況をふまえ、遺物などの様相から年代観を考慮し検討を進めていく。

平面形Ⅱ類(方形)もしくはⅠ類(台形)となる前壁が明瞭に存在するものは下尾崎4・5号墓があり、出土した土器などからは群中の初現として把握される。上栗原3号墓は比較的前壁の作りが粗雑となり、規模的にも小振りとなる。前壁角 110° 以上となるⅡa2類などは存在せず、近隣の岩井戸30号墓(註2)などが散見されるが、当該地域においては非常に少ないものである。下尾崎19号墓などは、奥壁から側壁が平行して延びており、Ⅱa3類(方形・前壁痕跡化)として捉えられる。側壁は羨門へ向かい幅を狭めるものとなり、上栗原6号墓などのⅠa3類(台形・前壁痕跡化)へと漸次的な変化も認められる。しかし、Ⅰa3類は形態的に明瞭なものが少なく、Ⅱa3類から下尾崎23号墓などのⅢ類(撥形)への直接的な変化も想定される。Ⅲ類の中には側壁が直線的なものと、下尾崎11号墓のように玄室内に内彎する一群も存在する。これに即して、初現から終末までの各段階を順に①～⑤段階として形態区分の根拠を示したが、③～⑤段階は遺物における時間軸が捉えられるものではない。

①段階 平面形態が前壁を持つもの。Ⅰ・Ⅱ類の前壁角 110° 未満が該当。

②段階 平面形態で前壁角 110° 以上となるもの。下尾崎、上栗原では認められない。

③～⑤段階 平面形態で前壁痕跡化となるもの。Ⅱa3類が該当。

平面形態が撥形に近似するが、Ⅰa3類として捉えられるもの。

平面形態が撥形となるもの。Ⅲa類が該当し、顕著なⅢb類は認められない。

遺物からの年代検討は追葬・伝世などの危険性を伴うものであるが、参考として例示した横穴墓についてみていきたい。

①段階の下尾崎4・5号墓では平瓶(7世紀前半)が、②段階の下尾崎19号墓では、土師器坏(7世紀後半)や刀子が出土する。③～⑤段階の下栗原6号墓では長頸瓶(7世紀後半)、下尾崎23号墓では甕(7世紀後半～末)が出土する。⑤段階の下尾崎1号墓では八窓罽や全国的にも類例の少ない輪鏡(7世紀後半以降)、上栗原5号墓では壺鏡(7世紀末)が出土している。

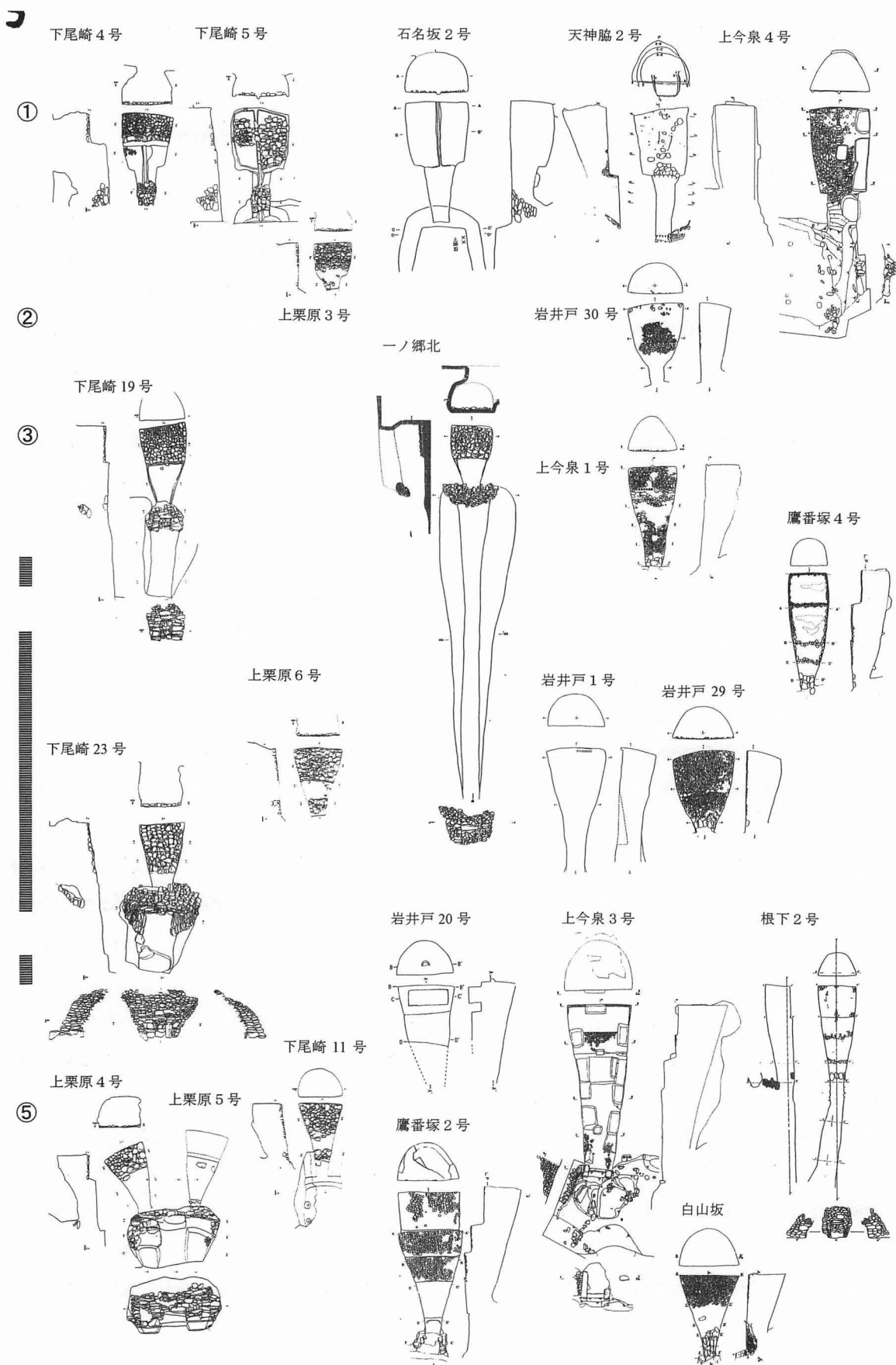
①段階は7世紀前半を中心とし、③～⑤段階は7世紀後半～末という年代が与えられるであろうか。

下尾崎や上栗原では崩落により不明とされた縦・横断面の形状を中心に、検討対象とした当該地域の様相を概観する(第3図)。

横断面(奥壁)の形態はほとんどがa類(アーチ)であり、他にはb類(尖頭アーチ)が散見されるのみである。a類は①～⑤段階まで存在し、b類は①・③段階で存在がみられ、比較的早い段階での消滅も想定される。

縦断面はB1類(有前壁天井形)が①段階にあるが、数量としては非常に少ない。また、上栗原4号墓はB2類となり、Ⅲ類の横穴墓においては特別な存在となる。他、①～⑤段階では概ねC類(無前壁天井形)となるが、岩井戸29号墓(註2)などは奥壁から羨門へ天井が湾曲して延びる形態となり、直線的に至る一群とは区別される。

付帯施設は石が多用され、全面及び棺座上のみの石敷き、石敷きにより棺座を志向するものなど多種みられる。棺座は低平なものが中心だが、③段階から高い棺座が出現する。①段階の下尾崎4号墓では比較的棺



第3図 県央地域の横穴墓の変遷

座が高いものであるが、地域内で見える限り特異な存在となっている。造り付け石棺も岩井戸20号墓(註2)で存在するのみで、数値的にⅢb類において主体となることが検討された高い棺座(高棺座)も少ないものであった。岩井戸は金目川流域に位置し、前面に展開する大磯丘陵付近に存在する横穴墓の影響を多分に受けていることも想定される。

下尾崎、上栗原では存在しなかったものとして、玄室平面の形態において幅が極端に狭くなる一群がある。③段階からその兆しはみられ、座間市域を中心として存在する。多くは羨門部に石積みを持ち、横穴式石室との関係も喚起される。岩井戸でも旧1号墓(註3)でみられ、県央地域内でも点在するものとして注意される。また、石名坂2号墓(註4)、天神脇2号墓(註5)では玄門部に、下尾崎11号墓、岩井戸A4号墓(註6)、鷹番塚3号墓(註4)などでは羨門付近に1段の段差が存在することも特徴としてあげられ、同じく地域内で散見される。

羨門部に石積みを持つものでは、秦野～座間・海老名市にかけておよそ24基がみられ、地域的な特徴の一つとして捉えられる。石積みの状況はその施工される箇所から、以下のa・b・cに大別される。

- a. 羨道の側面に石積みが施されるもの
- b. 前庭部羨門側のみ石積みが施されるもの
- c. 前庭部羨門側と側面にも石積みが施されるもの

玄室形態の分類においては、石積みのされない①～⑤段階と同様の変化をとるようであるが、縦断面・横断面の明瞭な遺存例は少ない。

①段階は天神谷戸1号墓(註7)などで羨道のみ石積みがされ、上今泉4号墓(註8)でも後出の3号墓と共通する前庭部を持つことから造り替えが想定され、4号墓の羨道から直線的に残る石積みは天神谷戸1号墓と同義となる可能性も指摘される。②段階は存在せず、③段階は前庭部羨門側のみ石積みがされるもので、一ノ郷北(註9)、下尾崎19号墓などが該当し、前庭部の幅は広いものが主体である。③段階以降～⑤段階は大半が前庭部羨門側面にまで石積みがされ、共通する前庭部を持つものも存在する。前庭部の幅は広いもの・狭いものがあり、それは玄室の幅と比例する。切石の使用も上今泉3号墓・鈴鹿(註10)などと幅には関わりなくみられ、段階内での年代差によるものかは遺物の出土が少なく不明である。付帯施設は玄室長の長いもので2段の棺座が多く、大半のものに玄室内の石敷きが見られる。⑤段階に該当する鷹番塚1号墓(註4)は前庭部側面までの石積みが無いものの、玄室は幅狭となり平面のみ見るとⅡa3類に類似する。

周辺の状況において、石積みは多摩川中流域の状況と近しく、羨門側の壁のみされるものや、礫を複数段積み羨門柱の明瞭な例は県央・県西部に限られるとされる(註1)。

(4) 横穴墓形態の地域的特徴

- ・家形やドーム形を呈す横穴墓がなく、玄室前壁角が 110° 以上となる②の段階が少ない。
- ・羨門部に石積みを施すものが多く、玄室内などには石を多用する。
- ・地形的な影響からか前庭部の長大なものが散見される。
- ・造り付け石棺は少なく、高棺座と呼べるものも少ない。
- ・下尾崎、上栗原では玄室は小振りな印象で、地域内では上栗原3号墓に類似するものも散見される。
- ・奥壁幅は①段階からの規模を継続する幅広と、③段階以降において幅狭なものが存在する。
- ・金目川流域の岩井戸などは羨門部に石積みを持ち、Ⅲ類では幅狭な玄室が存在するなど当該地域での検討としたが、②・④段階の横穴墓が比較的多く存在し、造り付け石棺を持つなど状況が若干異なる。(柏木善治)

・西湘地域（大磯町・二宮町・中井町・大井町・開成町・小田原市・南足柄市・真鶴町・湯河原町・箱根町）

（１）地理的位置と環境

ここである西湘地域は、主に旧足柄下郡一帯と足柄上郡の一部を合わせた地域で、北限を平塚市から中井・大井・開成町を経て南足柄市の北部を結ぶ現在の行政区とする。従って南が相模湾に臨み、東端は平塚市境とする。相模川から金目川流域一帯は相模平野が広がり、西側には約150km²の面積を有する大磯丘陵が位置する。大磯丘陵の西には足柄平野があり、中心を酒匂川が流れる。西～南端は箱根山地が連なる。なお、平塚市域については、次回、一つの地域金目川流域として検討を行う予定である。

（２）分布の状況

西湘地域の横穴墓の分布には明瞭な濃淡がみてとれる。最も密度が高い地域は大磯丘陵一帯で特に大磯・二宮町・小田原に跨る丘陵南側の斜面に集中が認められる。ついでその北方にあたる大磯丘陵北側～金目川水系中流域に広く分布する。大磯丘陵以西は極端に数が減り、湯河原町などの数例に留まる。今回の検討対象は主に大磯丘陵南側及び西側を中心とした二宮町・大磯町一帯に重点を置いて、地域の傾向をみていくことにする。大磯丘陵南側の事例として、二宮町中里に所在する、諏訪脇横穴墓群を取り上げる。

（３）諏訪脇横穴墓群について

諏訪脇横穴墓群は東海道線二宮駅の北方約2 km、打越川東岸に位置する南側に開口する丘陵谷戸部の南向き及び東向き斜面に位置する。遺跡は、国道271号線（小田原厚木道路）建設工事によって消失しており、現在は隧道の西側口一帯にあたる。工事に先立って1965年に調査が行われ、東部分（南向き斜面、以下東）、西部分（東向き斜面、以下西）に分割して報告されている（注12・13）。報告された横穴墓数は東17基、西16基の33基である。報告に拠れば、東がA～Eの5群に、西が1～6の6群にそれぞれ細分されている。なお、本文では、報告の整理番号を用い、（）内で表された調査番号は省略する。調査された横穴墓は標高35～50mの間に分布しており、大規模な横穴墓群である。横穴墓の形態は豊富で、平面形は分類で用いた台形（Ⅰ類）、方形（Ⅱ類）、撥形（Ⅲ類）、不整形（不整形）の基本形が揃っている。

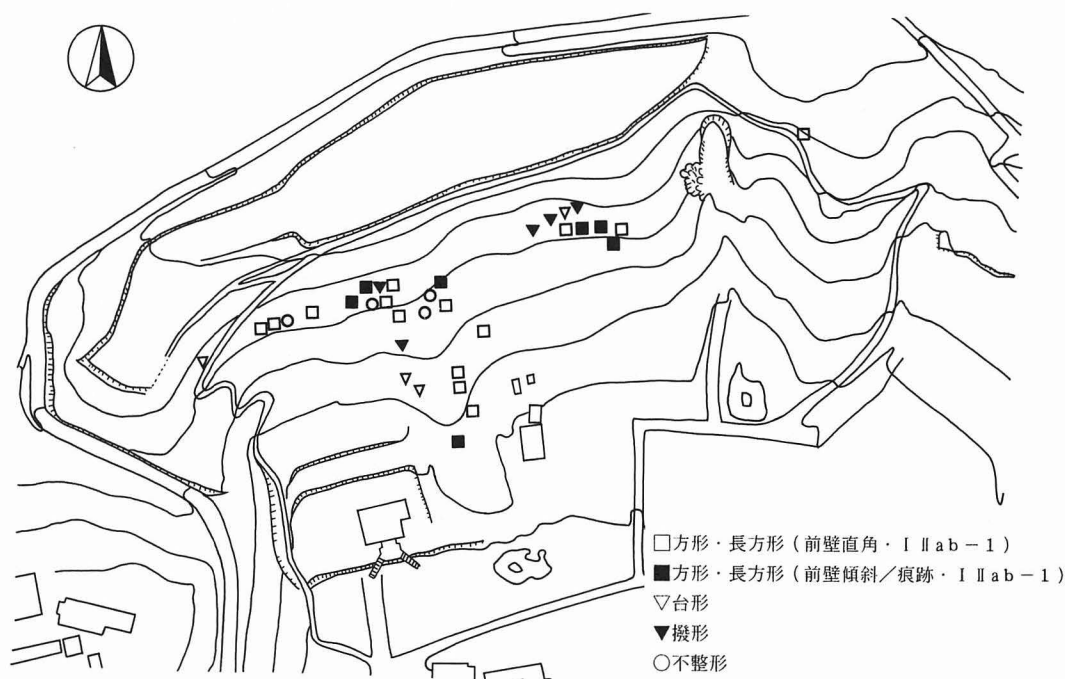
台形（Ⅰ類）は4基である。台形（Ⅰa類）のものは、平面傾斜前壁（Ⅰa2類）で、天井前壁も傾斜（B2a類（注13））である東6号から、同じく平面傾斜前壁で前壁片側が形骸化し奥壁に高棺座が付くが天井形は高棺座形独特の膨らみを持たず直線的（前面を欠いているがB類もしくはC類と推定される）な西15号となる。平面前壁痕跡化（Ⅰa3類）で奥壁・側壁に造付石棺を持ち、天井が高棺座形（E類）となる西1号は、平面形は玄室長が短く、通常の台形形態と異なる。また、天井形もドーム形に近く、通常の台形の潮流とは異なる形態の可能性を持つ。長台形のものは西1号のみで、平面、天井形とも前壁傾斜形（Ⅰb2・B2a類）であり、前壁の傾斜化が進行している。

方形（Ⅱ類）は計20基を数え、本横穴墓群の中で最も多い形態である。本類型は方形、長方形ごとに形態的な細分が可能と思われる。まず方形（Ⅱa類）は平面前壁直角（Ⅱa1類）の西5号、西8号、西11号、西12号、東2号が存在する。このうち西5号、西8号は天井ドーム形（Aa類）を呈する。西11号、西12号はドーム形だが横断面が平天井（Ad類）に近く、また平面前壁の片方が傾斜化している。東2号は天井が無前壁化（Ca類）している。東11号、東7号、東901号はドーム形天井（Aa類）で側壁に低棺座（東11号）もしくは造付石棺（東7・901号）を持つ。平面前壁傾斜形（Ⅱa2類）は天井ドーム形（Aa類）の東3号、東201号と天井無前壁形（Ca類）になる西16号がある。長方形（Ⅱb類）は平面前壁直角形（Ⅱb1類）で天井ドーム形（Aa類）のものに西2号、西3号、東12号がある。東1001号も同様の形態だが前壁の

片側が短い平面非対称形である。東1号は奥壁に造付石棺を持ち片側前壁が傾斜している。平面前壁傾斜形(Ⅱb2類)には、東5号、東999号がある。天井形はドーム形(Aa類)(東5号は縦断面は不明)である。西9号はドーム形だが横断面平天井に近く(A d類)、側壁に造付石棺を持つ。また今回、西6号を前壁痕跡化形(Ⅱb3類)として捉えた。天井形はドーム形(Aa類)、側壁に造付石棺を持つ。

撥形(Ⅲ類)では、撥形無施設(Ⅲa類)の東4号、東8号、東801号と奥壁に造付石棺を持つ(Ⅲb類)西13号に分けられる。不整形(Ⅳ類)はいずれも前壁を持ち(Ⅳb類)、平面形が長楕円を呈する、東10号、東13号、西4号、西10号の4基が存在する。天井形はドーム(Aa類)(東10号不明)である。

各形態の出土遺物については追葬の可能性もあり、横穴墓の築造年代と常に一致するものではないが、ひとまず遺物と年代観について触れておく。台形は先に述べた通り形態の変遷過程が追やすい類型で構成されているが、無施設の東6号(7C後～末)と奥壁に高棺座を持ち片側前壁が形骸化している西15号(7C中)の年代が逆転している。その他のものは年代を明確に示す遺物がない。方形は本遺跡の中で初源的と思われる平面方形・天井ドーム形(Ⅱa1・Aa類)の西5号・西8号で鉄鏃が出土しており、長3角形鏃を中心に構成されていることから、年代は挙げられないが本遺跡の中では古相といえる。細分した前壁片側が傾斜した西11号などのグループと側壁に棺座・石棺を持つ東11号などのグループは具体的年代を挙げるのが困難である。前壁が傾斜した(Ⅱa2類)では東201号の羨道～前庭部で7C末～8C初の土器が出土しているがこれは追葬が認められる。長方形(Ⅱb類)では平面前壁直角形の東12号が7C中頃～後半、奥壁に造付石棺を有する東1号が7C中頃、平面前壁傾斜形の999号が7世紀初～中、これに側壁に造付石棺を持つ西9号が7C中頃となっており、想定される形態変遷と一致をみない。撥形は無施設(Ⅲa類)の東801号が7C中～後半、東801号が7C後半～末、有付帯施設(Ⅲb)の西13号が7C後半～末となっている。不整形(Ⅳ類)は東10号、西4号が7C中頃～後半である。大まかな類型ごとの流れでは方形(Ⅱ類)→台形(Ⅰ類)・不整形(Ⅳ類)→撥形(Ⅲ類)となるが、若干の齟齬も認められる。Ⅱ類内の方形・長方形の関係は正方形が台形同様、天井形や付帯施設を含めて変遷過程が想定しやすいのに対して、長方形は天井形が一貫し



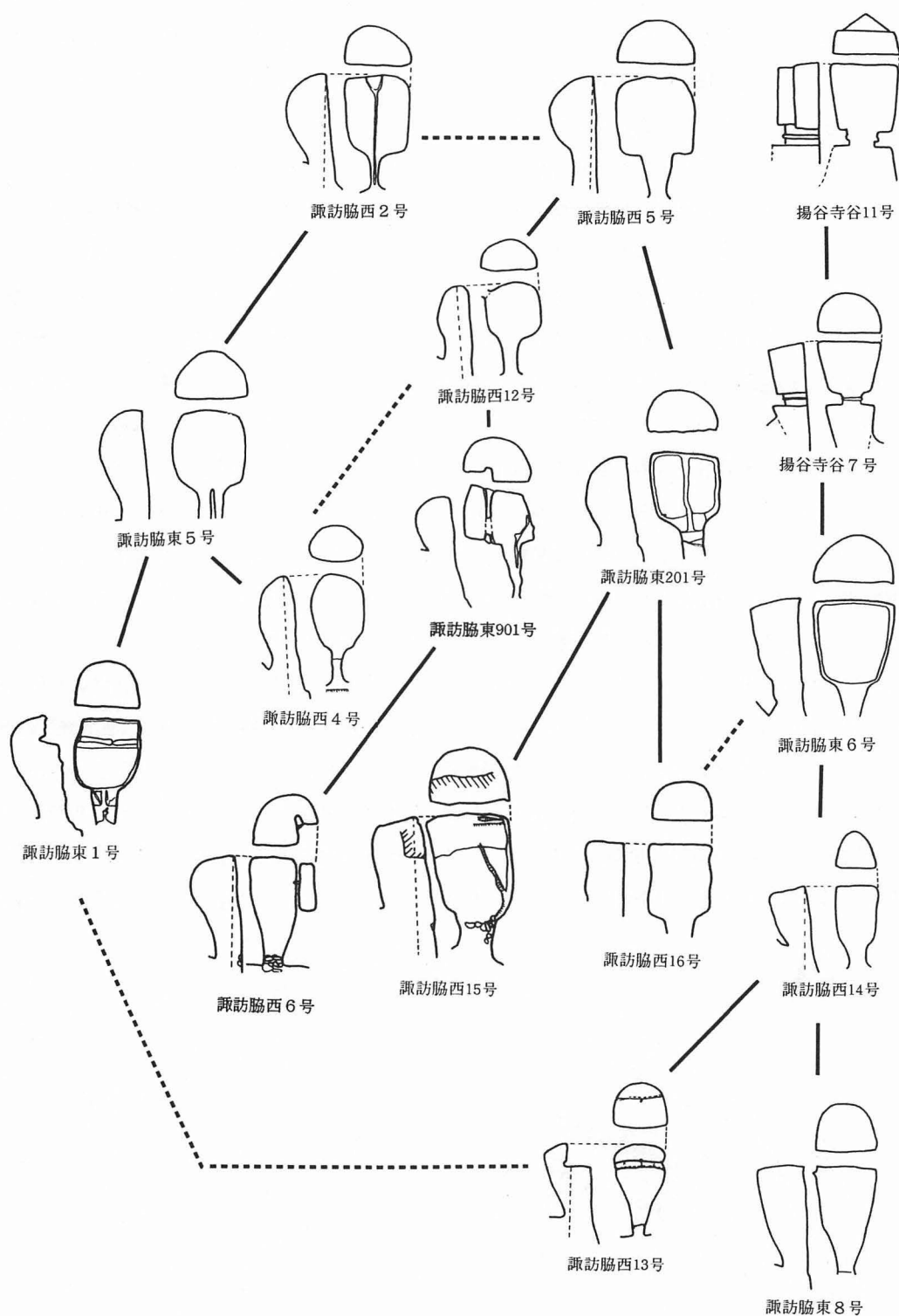
第4図 諏訪脇横穴墓群遺構配置図

①

②

③

④



第5図 西湘地域の横穴墓の変遷

てドーム形であり、遺物の年代に形態との差違が認められる。また、不整形（Ⅳ類）はいずれも平面前壁を持ち、天井ドーム形で、玄室長軸が長い点を考慮すると長方形からの派生が推定される。台形（Ⅰ類）については、本横穴墓群に前壁直角形の台形平面の横穴墓が無いこと、他の類型とは異なる天井傾斜前壁が主流

である点を考慮すると、その形態的系譜は外部からの影響を想定すべきかもしれない。

整理すると本横穴墓群は以下の変遷を辿る。

- ①前壁が直角の方形・天井ドーム形もしくは長方形・天井ドーム形を初源とする。
- ②次の段階では平面方形・長方形の中に片側前壁が傾斜化・短縮化した形態が現れる。この流れは側壁に棺座や造付石棺を持つ形態へと連なる。これと前後して、平面正方形・長方形は前壁の片側だけでなく両側が傾斜化が始まり以降進行していく。
- ③平面前壁の傾斜化が進行するとともに、棺座を持つ形態や楕円形平面なども加わり、バリエーションが増加する。数量の増大と共に横穴墓の築造は西地区から東地区へと移行する傾向が認められる。さらにこれと前後して、今までの系譜とは異なる平面台形・天井有前壁形が造られるようになり、以降この形態に連なる系譜が主流となる。
- ④平面台形・有前壁に継続して撥形の横穴墓が造られる。平面方形・長方形のドーム天井形は消滅する。

本横穴墓は多様な形態を網羅しているが、家形天井形が存在しない。家形天井形は大磯丘陵で方形平面（Ⅱ類）で3基、台形（Ⅰ類）で6基存在する。大磯丘陵に大磯町・揚谷寺谷横穴墓群、同南井戸窪横穴墓群では台形平面家形天井から台形平面有前壁への変遷が見て取れる（注14）。家形天井形とドーム形の新旧については明確ではないが、大磯町では明らかに6 C後半に遡るドーム形は知られていない（注15）等の状況から、今のところ家形天井形が先行すると想定される。

後半期の横穴墓では方形平面にはみられる天井無前壁形は、長方形平面にはないという傾向が大磯丘陵全体で認められる。また、撥形（Ⅲ類）は諏訪脇横穴墓では少数形態だが大磯丘陵全体では最も多い形態である（「横穴墓の研究（3）」）。撥形のものには、無施設、有棺座、有高棺座のものが存在するが、他の地域と比べ、本地域に限定されるような特徴的な形態は少数に限られ、一般的な変遷を辿ると考えられる。また、平面撥形の高棺座形態で、天井形が膨らみを持つドームに近い形態のものが存在している。形態的にみて、諏訪脇横穴墓群の西1号墓のような、ドーム形に近い天井で形骸化した前壁を持つものから、無前壁への変遷が推定される。高棺座でドーム形に近い天井は④段階まで一部で残存すると推定されるが、④段階の中でも早い段階に無くなると思われる。

（4）横穴墓の地域的特徴

以上のような諏訪脇横穴墓群の分析及び今まで行って来たⅠ～Ⅳ類の分析の中で、大磯丘陵での傾向を加味すると、次のような地域的特徴が認められる。

- ・家形天井形のものと正方形・長方形の平面でドーム形の天井を持つものの2系統が想定される。家形天井形は複室構造のものも存在する。初源は家形天井形の方が古いと想定される。
- ・平面方形・ドーム天井形の流れは前壁形態の崩れによってバリエーションを生み出し、有側壁石棺や楕円形の源流となる形態が現れる。家形天井形は、天井の簡略化、平面の台形化が進む。
- ・平面前壁の痕跡化が一層進むと共に、天井形が有段から直線的な形態になる横穴墓が造られるようになり、ドーム形天井に換わって主流となる。平面長方形は平面形の簡略化が進んでも天井形の組み合わせはドーム形が最も多く、天井無前壁化—平面撥形に繋がらない。
- ・平面台形・天井有前壁形は平面台形・家形天井形からの系譜で、平面撥形へ連なると考えられる。
- ・発達した前庭部は本地域では存在せず、前庭部を有するものも短い形態が主流である。（植山英史）

・三浦半島地域（横須賀市・三浦市）

（１）地理的位置と環境

三浦半島は県の南東端に位置し、東に東京湾、西に相模湾、南は浦賀水道に囲まれた半島である。地形的には丘陵が海岸まで迫り、海岸低地は狭小である。大河川は存在しないが、横須賀市内を南東に流れ久里浜湾に注ぐ平作川が最大の河川である。ここでは分布の傾向さらには地域の特徴をより鮮明にするため、横須賀市・三浦市に限定して検討を加えることとした。この範囲は、古代における御浦郡に収まる。

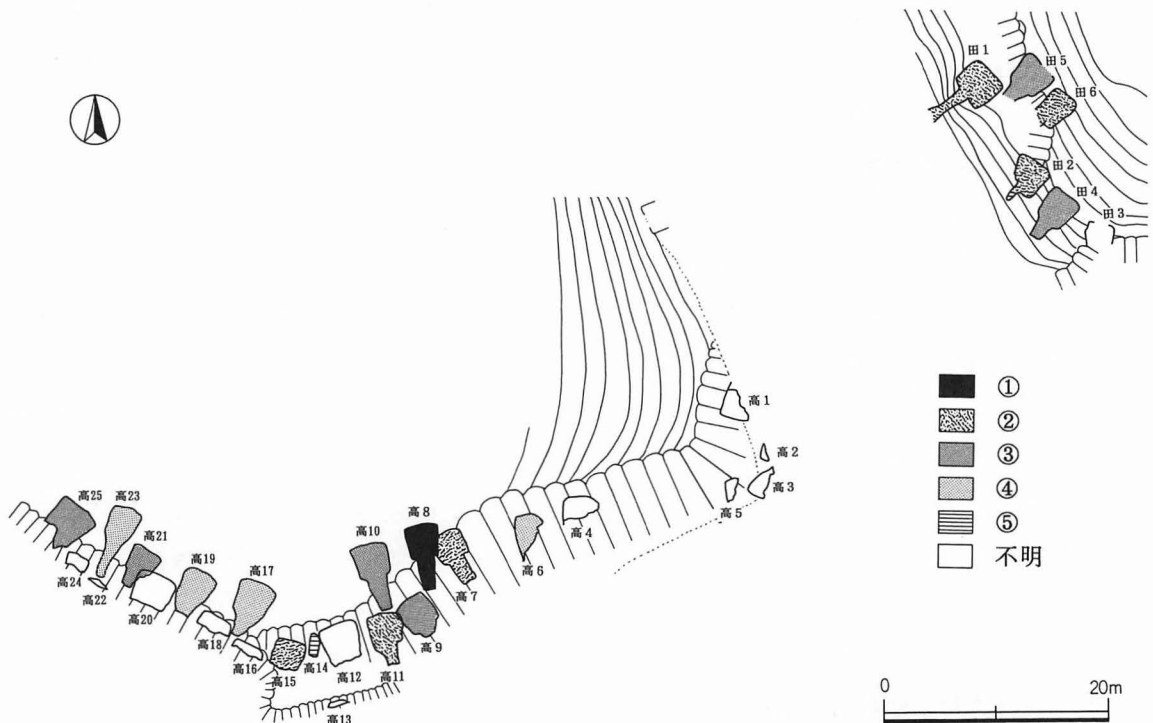
（２）分布の状況

この地域は、県内でも横穴墓の分布が比較的豊富な地域の一つで、その分布は大きくは西の相模湾沿い、南の三浦半島の突端部分、東の東京湾沿いに分かれ、とりわけ東京湾沿いは平作川流域を含め最も分布が密である。この付近には相模湾から三浦半島の中央を東西に横断して走水に至る、古東海道が存在したと考えられており、当時交通の要衝として重要な地域あったことが注目される。またこの地域では、総体的に海岸沿いに横穴墓が多く分布する傾向が窺え、海上交通との何らかの関わりも注目されるところである。

検討の対象となる横須賀市内では72遺跡、三浦市内では32遺跡の横穴墓が周知されている（註16）。調査事例も、大正年間の横須賀市烏ヶ崎横穴墓群（註17）をはじめとして比較的豊富であるが、今回はごく最近報告が刊行された横須賀市高山横穴墓群（註18）及び田戸台横穴墓群（註19）を取り上げることとする。

（３）高山横穴墓群及び田戸台横穴墓群を基にした検討

高山横穴墓群及と田戸台横穴墓群は、群として本来的に一体を成す横穴墓群で、横須賀市田戸台に所在する。古く大正11年（1922）に、赤星直忠によってその存在が確認され（註20）、4ないし5群によって構成されと考えられており、本来的には総数60基を優に越すであろう規模の三浦半島最大級の横穴墓群である。高山横穴墓群は当財団により、平成10・11年（1998・99）にかけて合計25基が、田戸台横穴墓群は、赤星を団長とする調査団により昭和63年（1988）に6基が調査されている（第6図）。両横穴墓群は幅約30mの谷を



第6図 高山横穴墓群・田戸台横穴墓群遺構配置図

隔てて、異なる群として対峙している。惜しむらくは、これら2群の横穴墓の中ではほぼその形態・構造の全貌を把握することが可能な数が1/3程度にしか満たないことである。しかしながら、県内では検出例が稀な家形構造の横穴墓を保有することが大きな特徴である。なお、今回検討の対象とした2群は群中の東に位置し、西にはさらに大きく2～3の群が存在する。したがって、群の全貌が解明されている訳ではない。

群中の横穴墓は、大きく5形態に分類することが可能である。基本的に平面形態は、玄室と羨道の区分の明瞭な定形した個体から、不明瞭な簡略した個体へ。断面形態は、前壁及びドーム天井の個体から、最終的に無前壁で奥壁と天井の接する部分に最高位が求められる個体へと、変遷の推移をとらえている。以下に、初源から終末まで順に1～5として形態区分の根拠を示した。

①家形構造の横穴墓で、端整な造りである。玄室床面の平面形態はI a (台形)。横断面はc (家形)。縦断面はD 2 (切妻)。天井は水平ではなく、奥壁と天井の接する最高位から玄室入口に向かって次第に高さを減じて前壁に接している。高山8号が唯一の存在で、7世紀中葉の須恵器坏身の細片が出土している。

②玄室床面の平面形態はII a (方形)で正方形に近い。横断面はa (アーチ)。縦断面はA (ドーム)。ただし奥壁から湾曲するのではなく、天井部のみがドーム状を呈する形態である。典型的な例は高山7号と田戸台1号の2基である。全貌は不明であるが、平面形態から田戸台2号、平面形態は破壊されて不明瞭であるが、ドーム状の天井を有することから田戸台6号もこの範疇としてとらえておく。また、左側壁に後世の改変を受け崩壊も著しく原形をとどめていないが高山11号、さらにこれも消失が著しいが方形の玄室平面形態及び遺構間の配列状況から類推して高山15号も、ここに含まれる可能性を指摘しておく。6基が該当。なお、田戸台1号からは、7世紀前半ないしは中葉にかけての土師器坏が出土している。

③玄室床面の平面形態はおおむねI a (台形)。横断面はa (アーチ)。縦断面はC (無前壁)。奥壁は直立せず内傾し、天井は奥壁の最高位から羨道入口に向かって直線的に次第に高さを減ずる。高山9・10・21・25号、田戸台4・5号の6基がこれに該当する。

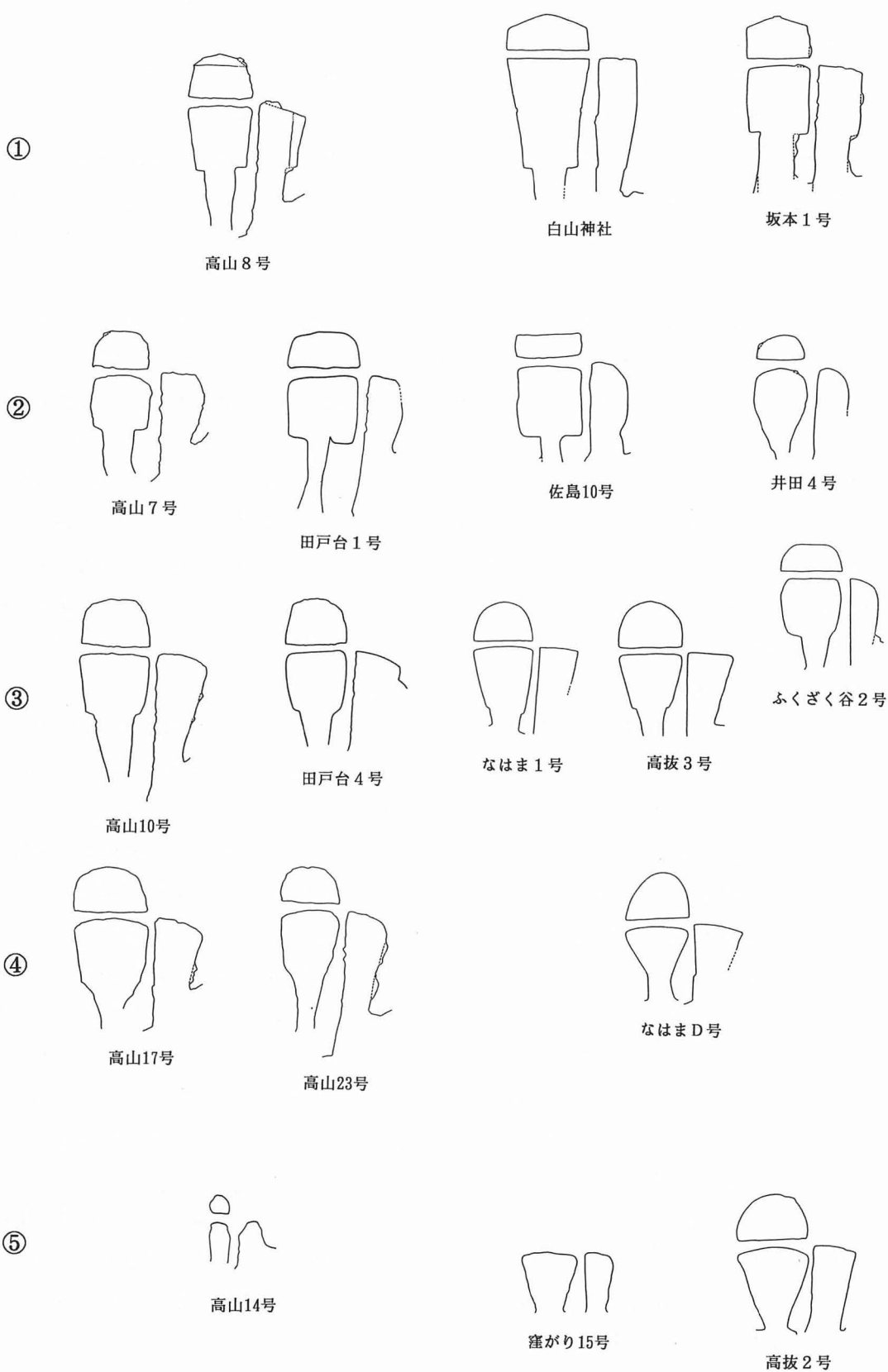
④羨道と玄室の区分が不明瞭。玄室床面の平面形態は前壁が痕跡化したI (台形ないしは長台形)。横断面はa (アーチ)。縦断面はC (無前壁)。③と同様に、奥壁は直立せず内傾し、天井は奥壁の最高位から入口に向かって直線的に高さを減ずる。高山17・19・23号がこれに該当し、残存度は少ないが高山6号もここに含まれると考えられる。計4基。高山17・23号からは7世紀中葉の所産と考えられる土師器坏が出土。⑤規模が極端に小形で羨道と玄室の区分が無く、玄室床面の平面形態はIV (不整形)、横断面はa (アーチ)、縦断面はC (無前壁)。構造そのものが粗雑である。該当するのは高山14号のみ。

以上が5形態の分類であるが、これらは便宜的に区分しただけで当然のことながら明瞭な区分ではない。例えば①から②への変遷は顕著であるが、②から③、③から④への推移は過渡的な形態が認められ、急激な変化ではなく、緩やかな変化であったことを示している。

また、いずれの横穴墓も構築時期を特定できる遺物の出土に極めて乏しく、土器編年から上記の変遷過程を検証することは困難であった。したがって、追葬時の問題もあるが純粋に出土土器を比較した場合の①と②の時期が逆転している。年代観としては、おおまかではあるが①を7世紀前後、②を7世紀前半代、③を7世紀中葉、④を7世紀中葉から後半代、⑤を8世紀前後の所産として想定している。

①を初源とし、②において急激にその数が増加し、以下③～④の時期においては②とほぼ同等の数で推移していることを指摘できる。最終末と想定した⑤は1例のみである。

検討の対象とした高山・田戸台両横穴墓群においては、上述したような形態の変遷過程を示せそうである



第7図 三浦半島地域の横穴墓の変遷

が、以下に広く三浦半島地域を概観してこれを補完してみることにする。

①の家形構造の横穴墓の典型としては、三浦市の白山神社(註21)と横須賀市の坂本1号(註22)があげられる。前者は玄室の規模が極めて大で、平面形態はⅠa(長台形)、横断面はc(家形)。縦断面はD2(切妻)であるが、天井部のみが若干ではあるがドーム状を呈する。後者は平面形態がⅡa(方形)、横断面はc(家形)。縦断面はD2(切妻)であるが天井部はほぼ水平である。構造そのものの企画性・完成度において、この2例は高山8号より若干先行する時期の所産と想定することも可能であろう。

②は床面の平面形態が方形を呈し、玄室と羨道の区分が明瞭で、奥壁はほぼ直立し天井部のみがドーム状を呈する形態であるが、この地域では他地域に見られるような、天井部に前壁ないしはその痕跡をとどめた例が認められず、前壁は①の段階で消滅していることが特徴である。②と並行するものとしては、ドーム天井を有する横須賀市佐島10号(註23)、さらには、床面の平面形態が胴張りで不整形であり、ドーム天井を有する横須賀市井田4号(註24)もここに位置付けられる可能性もある。

③は床面の平面形態が台形を呈し、前壁の羨道部との屈曲角度 110° 以上を基本とし、縦断面は無前壁の形態である。高山・田戸台では奥壁が内傾することが特徴であるが、これが直立する横須賀市なはま1号(註25)、三浦市高抜3号(註26)などはこの時期の範疇としてとらえている。これらは奥壁と天井部との境が、横穴墓内最高位を示すが、天井の中程に最高位が求められるいわゆるドーム天井を有する類も存在し、この時期にやや先行する要素を含んでいる。例として横須賀市ふくざく谷2号(註27)があげられる。なお、床面の平面形態が胴張り不整形を呈する個体は、この段階では姿を消していると考えられる。

④は床面の平面形態が台形及び長台形を呈し、玄室と羨道の区分が不明瞭ないしは痕跡化し、③と同様に縦断面は無前壁で奥壁が内傾する類である。小形で床面の形態がやや異なるが、なはまD号もこれとほぼ同時期の所産として考えている。この段階でドーム天井は認められなくなるが、なお奥壁が内傾する形態が多く存在し、ドーム天井の名残をとどめているとも言える。

⑤玄室と羨道の区分が完全に消失し、小形化して構造そのものが極めて簡略化する形態であるが、形態そのものは④の段階とはやや異なり、形態は必ずしも画一化されたものではない。ここではほぼ同時期の所産として、三浦市窪がり15号(註28)、高抜2号をあげておく(第7図)。

最後に、地域全般の横穴墓に指摘できることは、外部施設である前庭部が存在しないことである。明確に存在する事例が1例も確認されておらず、本来的に構築されていなかったと認識せざるを得ない。急峻な崖の硬質な岩盤を造成して墓前に一定の平場を確保するには、大変な労力を必要とすることは言うまでもない。構築されなかった事由としては、地形的、地質的制約がその大きな要因であったと理解できよう。

(4) 横穴墓形態の地域的特徴

- ・家形を初源とし、定形から簡略化へとごく普遍的な変遷をたどる。
- ・平面形態と断面形態は同時に変化するのではなく、個体によって差異が認められる。
- ・天井部の前壁は初源期で消滅する。
- ・ドーム天井及びその系譜を引く天井が、長期間継続する。
- ・玄室と羨道の区分は、比較的長期間その痕跡をとどめる。
- ・玄室の付帯施設(造付石棺・棺座・棺室)がほとんど認められない。
- ・外部施設(前庭部)が存在しない。
- ・終末期において規模が小形化し、構造が極めて簡略化する。

(上田 薫)

註

1. 立花 実 1995「三ノ宮・下尾崎遺跡 三ノ宮・上栗原遺跡発掘調査報告書」『伊勢原市文化財調査報告書』第17集
2. 杉山博久 1985「秦野市内の横穴墓群」『秦野の文化財』第16集
杉山博久 1985「岩井戸横穴墓群」『秦野市史』別巻 考古編
3. 久保哲三・曾根博明 1974『秦野下大槻』(『秦野の文化財』第9・10集)
4. 金子皓彦 1977「鷹番塚横穴」『座間市文化財調査報告』第3
5. 柳川定春 1975「天神脇横穴群緊急発掘調査報告書」『秦野の文化財』第11集
6. 後藤喜八郎 1998『秦野市岩井戸横穴墓群発掘調査報告書』岩井戸横穴墓群発掘調査団
7. 鈴木 茂 1966「厚木市林横穴古墳調査報告」『厚木市文化財調査報告書』第4集
伊藤秀吉 1993「林王子遺跡」『厚木市史』古代資料編(1)
8. 福田 良 1998『上今泉横穴墓群発掘調査報告書』上今泉横穴墓群発掘調査団
9. 諏訪間伸 1990「上粕屋・一ノ郷北遺跡発掘調査報告」『文化財ノート』第1集
10. 下津谷達男 1956「神奈川県座間町鈴鹿横穴古墳」『考古学雑誌』第41巻第4号
11. 三上次男・大井晴男 1972「諏訪脇横穴墓群(東部分)」神奈川県埋蔵文化財調査報告3 神奈川県教育委員会(12)
12. 赤星直忠 1973「諏訪脇横穴墓(西部分)」神奈川県埋蔵文化財調査報告4 神奈川県教育委員会
13. 東6号は「横穴墓の研究(2)」中の表で断面形B1aと記されているがB2aに訂正する。
14. 赤星直忠 1964「神奈川県大磯町の横穴」大磯町文化財調査報告代1輯 大磯町教育委員会
15. 鈴木一男・國見 徹 1996「大磯町の横穴墓群」『考古論叢神奈河』第5集 神奈川県考古学会
16. 神奈川県教育委員会 2000『神奈川県埋蔵文化財地図』『神奈川県埋蔵文化財包蔵地台帳』
17. 赤星直忠 1925「相州鴨居の横穴(一〜三)」『考古学雑誌』第15巻8・9・11号
18. 財団法人かながわ考古学財団 1999『歌舞島やぐら群・げんじ谷横穴群及びやぐら群・高山横穴墓群
・堂地谷やぐら群』かながわ考古学財団調査報告62
財団法人かながわ考古学財団 2000『高山横穴墓群(2次)』かながわ考古学財団調査報告87
19. 青木 司他 2000「田戸台横穴墓群発掘調査報告」『横須賀市文化財調査報告書』第35集
20. 横須賀市人文博物館所蔵「赤星ノート」コピーより
21. 赤星直忠 1950「三浦郡菊名切妻造妻入家形横穴」『神奈川県史跡名勝天然記念物調査報告書』第十
七輯 神奈川県教育委員会
22. 赤星直忠他 1981『横須賀市坂本横穴の調査』坂本横穴調査団
23. 赤星直忠他 1979『神奈川県史』資料編20 考古資料 神奈川県県民部県史編集室
24. 川上久夫他 1994『井田横穴群B地点の調査』急傾斜地区埋蔵文化財調査団
25. 赤星直忠 1960「横須賀市なはま横穴群」『横須賀市博物館研究報告(人文科学)』第4号
〃 1961「なはま横穴群(第二次調査)」『横須賀市博物館研究報告(人文科学)』第5号
26. 浜田勘太 1975「三浦市高抜横穴古墳群について」『横須賀考古学会年報』18
27. 赤星直忠 1958「こんぴら山古墳並横穴群」『横須賀考古学会年報』3
28. 浜田勘太 1954「三崎の古墳」『三崎郷土史』第九輯